
藤崎了ーインタビュー

「現象を抽出する新表現」
インタビュワー：生駒芳子

藤崎了ーは、いわゆる写真家、画家、彫刻家といった肩書きを持つアーティストではない。メディウムを限定しないのが彼の特徴のひとつであり、自身の思い描いた完成を目指すような作品とは一線を画す。2015年夏、Kana Kawanishi Galleryでは写真というメディウムを既成概念から外し、その本質を作家がそれぞれに解釈した作品を展示するグループ展「contact」が開催された。展覧会に際して開かれたトークショーで、写真、彫刻、パフォーマンス作品について語った言葉を通して、制作のアプローチに迫る。

今回の展覧会では、写真作品と彫刻作品の両方を展示されていますが、まずは写真作品「Colored Oil」についてお話しいただけますか。

既視感から外れたところで、イメージを飛躍させる視覚的な作品が撮りたいとずっと考えていました。約10年前に油と水性の液体が混ざることによって生成される面白い形をひたすら連続撮影するシリーズを初めて制作しました。白い陶器の皿の上に油を入れ、そこに墨汁を入れて攪拌し、1cmほどの距離から接写しています。墨汁は何種類かの色があり、きめが細かいんです。

サイケデリックな色ですね。最初に見た時の印象は、宇宙みたいだなと思いました。

「ここはこうなった方がいいな」と考える前にシャッターを押す作業を連続することで良い写真が撮れると写真家の新津保健秀さんがおっしゃっていたのですが、僕もその通りだと思っていて、頭の中で言葉が整理される前に、撮るようにしています。

意識に支配されないように、ということですね。ある種の無意識でしょうか？

言葉が出なくても絵が浮かぶことは意識だと思うので、無意識というよりむしろある精神状態を強く意識してると言えます。石膏の作品は、細いか薄い支持体に石膏の霧を堆積させ続けながら作っています。このような連続性の中で作られる作品は、本質的に完成がなくて、どこまででも作り続けることも、もっと手前で終わりにすることもできます。

植物なんかが、成長の過程にありながら常に肯定的な美しさをもたらしていて、そういうことが美術でもできないかと思っていました。霧状の石膏が降り積もって形作られていく制作方法の状態や状況をそのまま示すことで、そういったことが表現となるよう意識しています。

この作品は「どうやって立っているのだろう」と思わせる、その危うさがとても素敵だなと感じました。

危うさや不思議さを感じるようイメージしてますね。天高が4メートルあるアトリエにφ1mmのワイヤーを天井から吊るして床で固定し、ひたすら石膏を吹き付けていきます。ワイヤーは上の方では消えていくような感じで見えていてまるで永遠に続くように思えます。その空間に立体が生まれていくイメージで吹き付けていきます。

ある程度堆積した後に青い墨汁を染み込ませました。墨汁を染み込ませて上からさらに石膏を塗装すると、石膏の表面に青い色が滲み出てくるんです。厚みを持った作品の表情の中に染色され、滲み出した現象を目にすることで、時間軸や空間の奥行きを視覚的に感じる事ができれば皮膚感覚が開いて瞑想状態に近くなるのではないかと考え、つくり方を知ってイメージしたとしてもそういった体験が出来るよう成り立ち方にはこだわっています。

今回は展示されていませんが、「Crash Addict」という「壊す」映像作品は、どのようにして生まれたのでしょうか。

大学卒業後、造形屋や塗装、解体などいろんな職場を体験する中で、技術はどうでもいいから、僕のこういう性質や構造の作り方に特徴があるのか探っていました。当時の職場で不要なものが沢山出てきて、それらをゴミ回収の据置きコンテナに入れるために小さくしなければならなかったのですが、仕事が溜まっているから急いでやらなくてはならなくて、バババツと急いで壊していったら、いろんな人が笑いながら「面白い」と。淡々と見事に壊していると。

「壊す」ということ自体は60~70年代に散々やられたことなので、その時は作品としては考えることはなかったんですが、後に2014年にホテルアンテルーム京都で開催された名和晃平プロデュースの展覧会で初めて「Crash Addict」を上映することになります。その時は僕が壊すのを見てみたいという声がいくらかあって、自分がその行為をすること自体に特徴があるならやってもいいのかもと思うようになっていました。

本当なら目的があつての壊す行為ですが、「壊す」ということが作品になっていますね。パフォーマンスを見ていると、もっともっと壊れそうな気もするのですが、どこで壊すのは終わりになるんですか？

対象物が簡単に壊れるところが壊れたら終わりです。求めているのは、破壊の「執念」ではないので。良い音が出て、気持ち良く壊れるように判断しながら物を壊していきます。

このパフォーマンスに対して、ネガティブな反応を示した人はいましたか。

「何で壊すことが作品になるのか」という疑問を持つ人もいました。

その質問に対してどのように答えましたか。

音だけを聞くと、制作をしているように聞こえてくるんです。仕事をやる時に職場にはいろんな人がいて、そんな中で人が好意的に気になるような作業をしているということは、その時点でその作業は人とコミュニケーション取れているということであって、それは表現につながると思うんです。僕にとっては「壊す」という作業を通して、コミュニケーションが生まれるので、表現として成り立っていると思っています。